議長　副議長　局長　GL　係　回覧

様式第１号

2022年10月7日

真庭市議会
議長 小田康文 様

真庭市議会 受付 '22.10.17 14

真庭市議会議員 代表 庄司史郎

調査研究、研修会、~~要請・陳情~~活動届

政務活動費を使用して、下記のとおり研究、調査等を行いますので届けます。

記

1　区　　分　　(調査研究)　(研修会)　要請・陳情活動

2　訪 問 先

10/19 福岡県大木町、みやま市
10/20 熊本県熊本市
10/21 同　上

3　内　　容

10/19 バイオ液肥化処理施設について研修・研究
10/20 全国過疎問題シンポジウム研修
10/21 同　上

4　行　　程　　別紙のとおり

5　事務局から訪問先への依頼　　(必要)　・　不要

（注）複数の議員で実施する場合、代表者の届けでよいが、参加議員名簿を添付すること。

１０月１９日～２１日にかけての研修参加者

庄司　史郎（しょうじ　しろう）

大月　説子（おおつき　もとこ）

森田　敏久（もりた　としひさ）

黒川　　愛（くろかわ　あい）

伊賀　基之（いが　もとゆき）

伊藤　義則（いとう　よしのり）

森真会

研修日程

2022年 10月19日

出発/到着

出発/到着	日付	時刻	交通機関	フライト番号ほか	出発地 到着地	備 考
出発	2022年10月19日	5:30	クルマ	岡山道経由	真庭市	落合総合センター駐車場
				69.9km		
到着		7:00			岡山駅	ピギーパーキング
出発		7:15	新幹線	さくら541号	岡山駅発	
到着		9:24			久留米駅着	
乗換		9:38	在来線	鹿児島本線　快速　八代行き	久留米駅	
到着		9:49			羽犬塚駅着	
出発		10:00	ジャンボタクシー		羽犬塚駅	（有）ニコニコ筑後タクシー
到着		10:15			おおき循環センター	
研修		10:30～		視察・研修	おおき循環センター	福岡県三潴郡大木町横溝１３３１－１
		12:00		視察・研修		0944-33-1231
昼食		12:00～13：00		昼　食	道の駅 くるるん	福岡県三潴郡大木町大字横溝1331-1
						0944-75-2150
研修		13：30～14：30		視察・研修	環境プラザ	
出発		14:45	ジャンボタクシー		環境プラザ	（有）ニコニコ筑後タクシー
到着		15:30～16：30		視察・研修	みやま市バイオマスセンター	福岡県みやま市山川町重富121
出発		16:45	ジャンボタクシー		みやま市バイオマスセンター	（有）ニコニコ筑後タクシー
到着		17:00			筑後船小屋駅着	
出発		18:15	九州新幹線	つばめ331号	筑後船小屋駅発	
到着		18:38			熊本駅着	
宿泊				チェックイン	ホテル	ホテルルートイン熊本駅前
						2022年10月20日
出発	10月20日	8:30		チェックアウト	ホテル	
				災害復旧状況視察	ジャンボタクシー	熊本城方面へ
到着		12:00		市民会館シアーズホーム夢ホール	20日～21日	全国過疎問題シンポジウム
閉会		16:45				閉会後ホテルへ
宿泊				コンフォートホテル確保スミ		熊本市中央区新市街2－10
						2022年10月21日
	10月21日			チェックアウト		コンフォートホテル
出発		8:00	バス	視察・研修	熊本桜町バスターミナル	第3分科会水俣市へ
解散		17:00				熊本駅解散
出発		18:04	新幹線	さくら568号	岡山へ	
到着		20:31			岡山駅	
落合着		22：00頃	クルマ	岡山道経由　69.9Km	真庭市	落合総合センター駐車場

議長　副議長　局長　GL　係　閲覧

２様式第２号

真庭市議会 受付 '22.11.10 14-2

報　告　書

令和
~~平成~~ 4 年　11 月　10 日

真庭市議会議長　小田　康文　殿

報告者　真庭市議会議員　氏名　庄司史郎
大月説子
森田敏久
伊藤義則
伊賀基之
黒川愛

下記のとおり政務活動費を使用して　調査研究・研修会 ~~・要請陳情活動~~をしましたので、その結果を報告いたします。

1　日　時	自　令和 4 年 10 月 19 日（午前・午後） 5時 30 分 至　令和 ~~平成~~ 4 年 10 月 21 日（午前・午後 22時 00 分
2　場　所	19日：10時30分～おおき循環センター「くるるん」
	13時30分～環境プラザ
	15時30分～みやま市バイオマスセンター「ルフラン」
	20日：午前中平成28年熊本地震による災害復興状況を視察（熊本城）
	午後13時～「全国過疎問題シンポジウム2022inくまもと」
	21日：現地視察（水俣市/多良木町）
3　用　件	生ごみ資源化事業の先進地を視察し、真庭市の取り組みに活かす。
	環境プラザを視察し、ごみの分別の事態を学ぶ。
	熊本地震による被害の復興状況を視察し、災害対応意識を高める。
	過疎地域の取り組みを聞き、真庭市の地域づくりに活かす。
	水俣市のICT技術を活用したオンライン診療を視察する。

4 概　　要

10月19日　10時30分～おおき循環センター「くるるん」を視察。

大木町まちづくり課環境グループ係長石橋浩二様より説明を受ける。

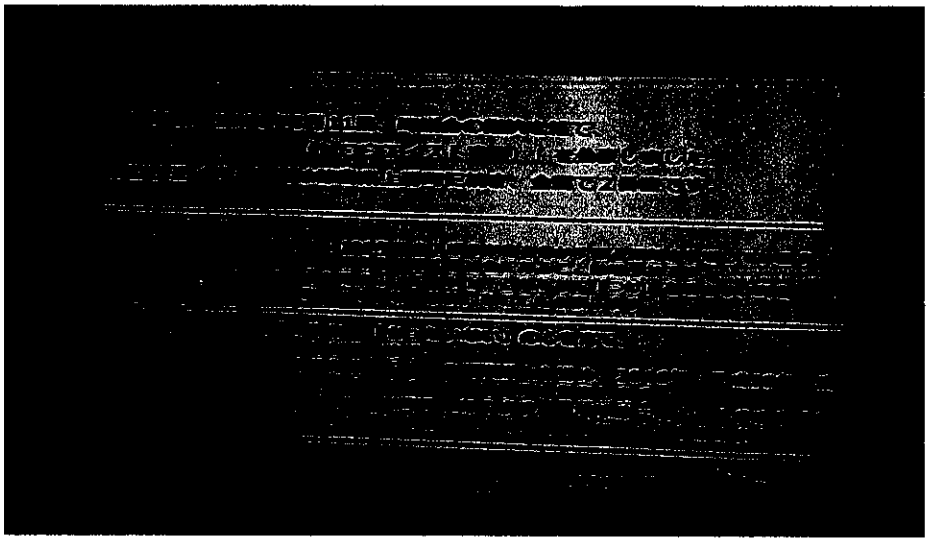
石橋さんの案内で、「くるるん」を見学する。できた液肥は意外に臭くない。
大木町は濃縮しない。濃縮するとこれ以上の臭いになるかもと。

石橋様より「大木町がめざす環境のまちづくり」のパンフレットを中心に、パワーポイントを用いて、これまでの取り組みと成果について説明を受けた。

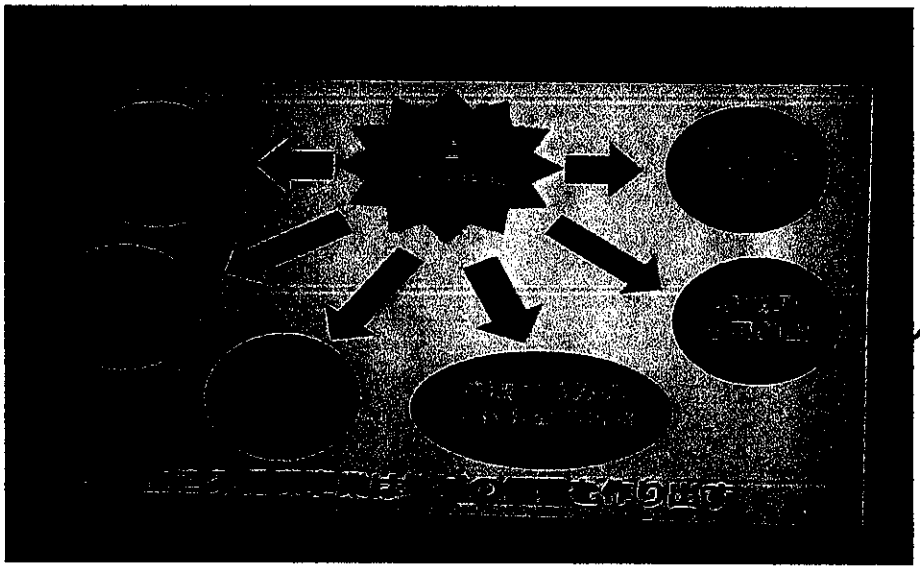
大木町は、2008年3月11日、町議会の議決を経て、全国で2番目「もったいない宣言（ゼロウエスト宣言）」を公表した。ごみゼロへの挑戦として、町民に29分別に協力して頂き、市民の分別への意識は高く平成30年度のリサイクル率は65.4%とのこと。具体的なリサイクル率は、カン（アルミ、鉄）93%、ペットボトル85%、生ごみ（食品製造業95%、食品卸売業65%、食品小売業49%、外食産業23%、一般家庭発生量832t）と説明を受けた。液肥は、主に米と麦に活用しているとのこと。処理費用の削減効果は、毎年3千万円で、約2億/年程度（人口14,233人。2019年5月現在）に削減できている。家庭系ごみの収集方法は、燃やすごみ、生ごみ、プラスチックはルート収集を、紙おむつ、新聞、段ボール等は常時ボックス収集を、缶、びん、ペットボトルは地区資源ごみ分別収集か環境プラザに持ち込み収集。分別をしてごみを減らした人が得をする仕組みとして、ごみ袋の値段見直

しを行ったとのこと。(燃えるゴミ指定袋35L30円⇒60円へ)また、地区別収集で成果があがった地域には温泉入浴券を配る等、地域に還元する様々な仕組みを考えられていた。更に、ごみを削減して浮いた経費を、市民に示しながら進めたとのこと。

真庭市のごみ処理にかかる経費は約7億円ときいている。人口4万3千人ベースで考えると大木町より約1億程度経費が多くかかっていることになるのではないか。ごみの問題は、分別して再利用すること、生ごみを活用すること、燃えるごみを減らすこと、が3本柱であるが、どれをとっても市民の意識改革が求められる。大木町はコンパクトシティで高齢化率も低いため、市民への周知が進みやすいとはいえ、ごみ問題についての先進地であることを学んだ。真庭市も、ごみ問題についての市民意識をどのように醸成させるのか大きな課題に直面している。

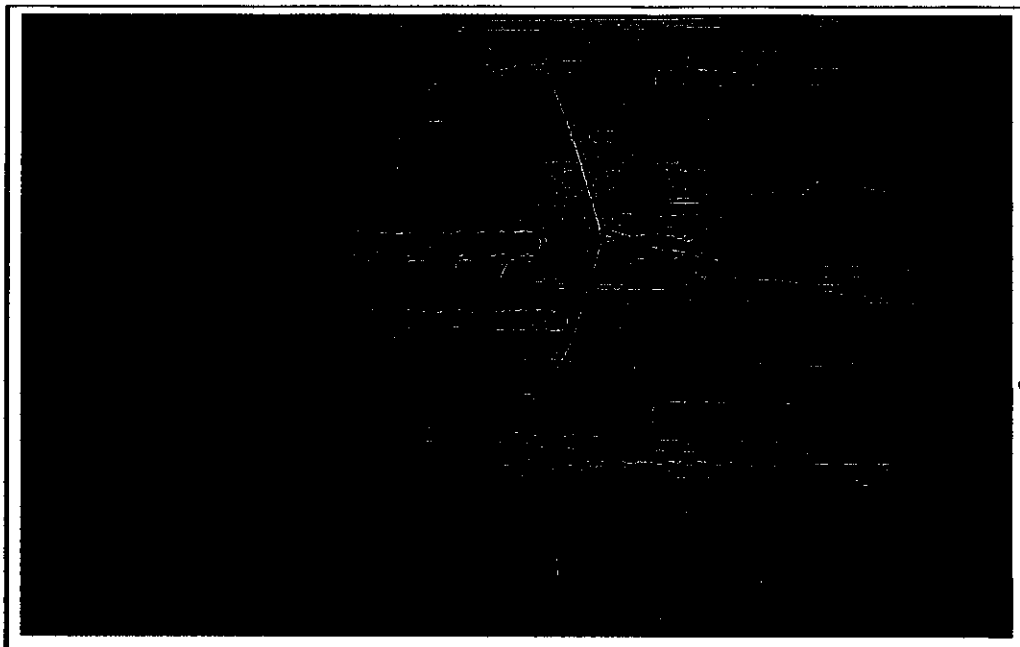


大木町もったいない宣言



生ごみ循環事業の効果

大木町のごみの分別の大きな特徴として、オシメのリサイクルに取り組んでいることがある。オシメは、高吸収ポリマーでできているため、水分を置く含み、燃焼させるためには多くのエネルギーを必要とする。大木町は、平成23年10月から、リサイクル施設で水溶化分離処理を行い、再生パルプを作り、外壁材として利用することに取り組んでいる。このリサイクル施設が大牟田市にあり、近隣ということで、輸送経費が少なく、効果を上げている。



ごみ事業の取り組みの経過と、燃やすごみ、資源ごみ、燃えないゴミの量の推移。

12時30分～デリ＆ビュッフェくるるんで昼食

道の駅と隣接したお食事処である。野菜を中心にした手作り料理を1時間1,650円で提供している。割高感はあるものの、平日にもかかわらず大勢の利用客があるのに驚いた。時間待ちのお客さんもおられ、大盛況であった。外では、親子連れのご家族が遊んでおられ、町の賑わいに一役買っている様子がうかがえた。

13時30分～大木町環境プラザを見学

ごみの分別ごとに細かく置き場所が決まっており、休みには資源ごみの持ち込みが多いとのこと。

環境プラザは、バイオマスセンターくるるんから車で20分の所にあり、分別ごみの回収と利活用を行っているところである。真庭市で言うと、久世のクリンセンターに分別ごみの回収場所を設置したようなところである。職員は、他市から移住してこられたようで、ごみの分別とリユースに誇りを持って働かれておられたことも印象的でした。

リユースプラザであるが、品数は真庭市のほうが多い感じがした。

15時30分～みやま市バイオマスセンター「ルフラン」を視察

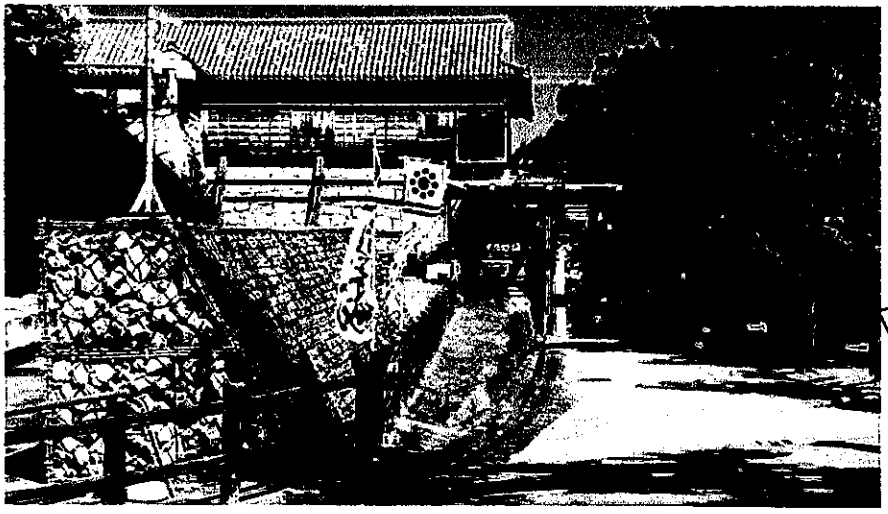
みやま市議会事務局参与、田中裕樹様の歓迎の挨拶の後、環境衛生課山下様より、みやま市バイオマスセンターの取り組みについて説明を受ける。

みやま市は、人口35,788人(2022.3月末現在)で農業が基幹産業の町である。米・麦の二毛作を中心に、なす・みかん・高菜・とまと・等野菜や果樹の栽培を行っている。バイオマスセンター「ルフラン」は、2016年3月に廃校となった山川南小学校の廃校活用としてスターし、資源循環緒まちづくりの拠点となっている。2013年から、生ごみ収集モデル事業と液肥散布モデル事業に取り組んでいる。液肥の生産量は2021年11,794t、液肥消費量11,403t、散布面積261haである。バイオ液肥「みのるん」は無料であるが、運搬車:550円/台、散布車1,100円/10a、小学校区ごとに17か所に無料液肥タンクを設置している。一方ごみは29分別を行い、2016年の焼却量8,656tに対し2021年6,097tに減少し、リサイクル率も16%から34.8%と上昇している。紙おむつのリサイクルにも平成27年から取り組み、市内39か所に24時間365日いつでも出せるボックスを設置している。2021年に「ゼロカーボンシティみやま」を表明し、農林水産省ディスカバーむらの宝賞(廃校活用)を受賞している。

液肥貯蔵タンク、その他サテライト液肥貯留設備もある

廃校になった山川小学校の一部を活用して、カフェを設置している。2021年度カフェ営業280日、オフィス利用者100人、加工室利用回数320回。

10月20日午前中：平成28年熊本地震による災害復興状況を視察

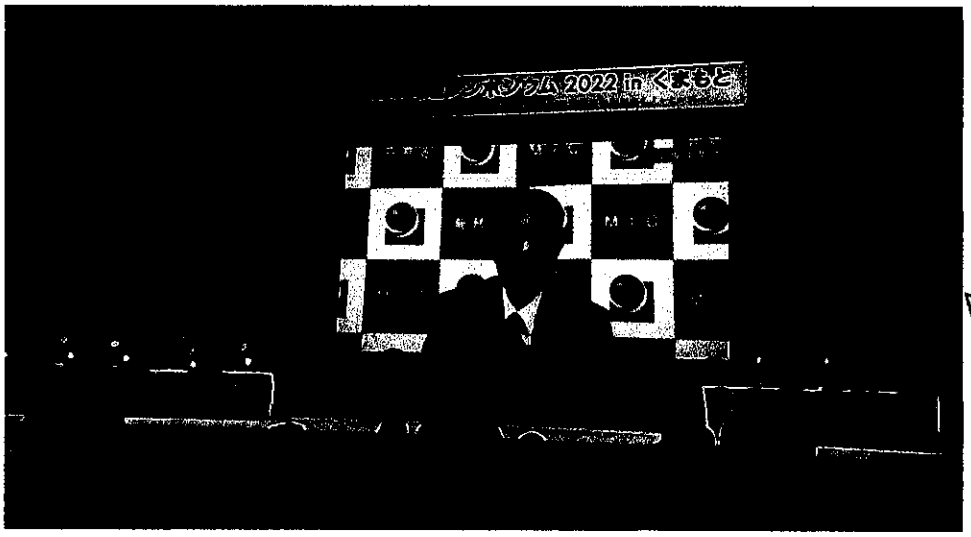


熊本城は、加藤清正によって築城され、「武者返し」と呼ばれる反りのある高石垣や巧みな縄張りが特徴で、日本3名城の一つである。

熊本地震によって、600か所以上の甚大な被害にあい、城の修復は20年以上かかるだろうと説明を聞いた。多くの小学生が、災害授業の一環で見学に訪れていた。

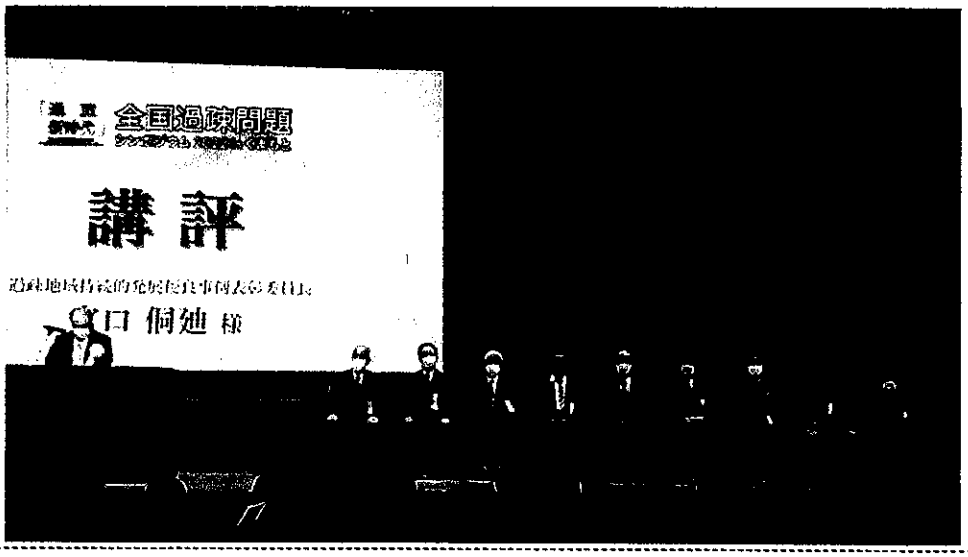
10月20日13時～「全国過疎問題シンポジウム2022inくまもと」に参加

全国過疎地域連盟熊本県支部支部長、美里町長:上田康弘様開会宣言



主催者挨拶、総務大臣:森田稔氏がビデオメッセージで挨拶その後、歓迎の挨拶:熊本県知事:浦島郁夫氏挨拶

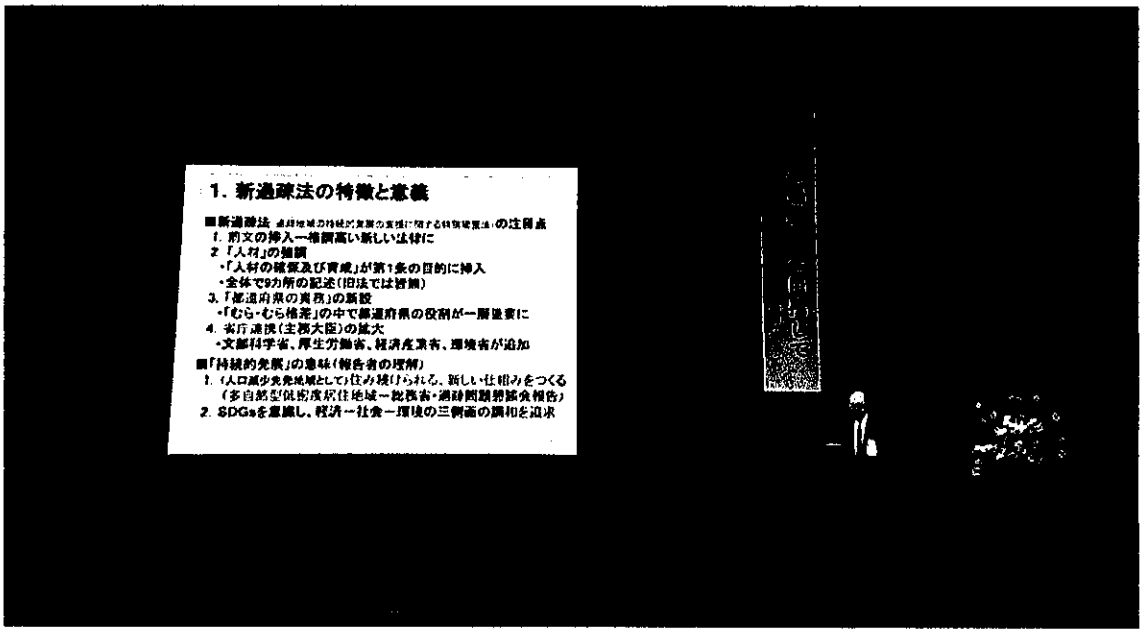
13時20分～令和4年度過疎地域持続的発展優良事例表彰式
連盟会長賞、総務大臣賞、等5団体が表彰を受けた。



宮口としみち
早稲田大学名誉教授・文学博士より講評があった。

5団体に共通しているキーワードは、人材と地域の文化や伝統に配慮した活動であった。

14:05分～基調講演「にぎやかな過疎を目指して」:明治大学農学部教授



＊新過疎法の特徴と意義

過疎地域とは、全体として人口減少過程にある我が国の中で、そこに必要な挑戦のフロンティアとして、国によって位置付けられた地域であろう。このように考えると、過疎指定地域が、市町村の過半数に及んだことを否定的に捉える必要はない。むしろ、新しい仕組みの構築に挑戦する地域が多数を占めたと考えたい。そのため、新たに指定を受けた市町村では、「地域資源高密度地域」「人材増地域」にむけた、従来とは異なる仕組みづくりを強力に進めることが社会的に要請されている。」

＊過疎地域再生の地域戦略―地域づくり―　その原則

①内発性―地域の思いと力で
②多様性―地域なりに
③革新性―今までとは違う方法で
} 地域を作り直す

＊「地域づくり」の3要素←各地の実践からの抽出

①暮らしのモノサシづくり＝主体づくり―人材
②暮らしの仕組みづくり＝場づくり―コミュニティ
③カネとその循環づくり＝条件づくり―しごと
} 一体的対応＝地域づくり

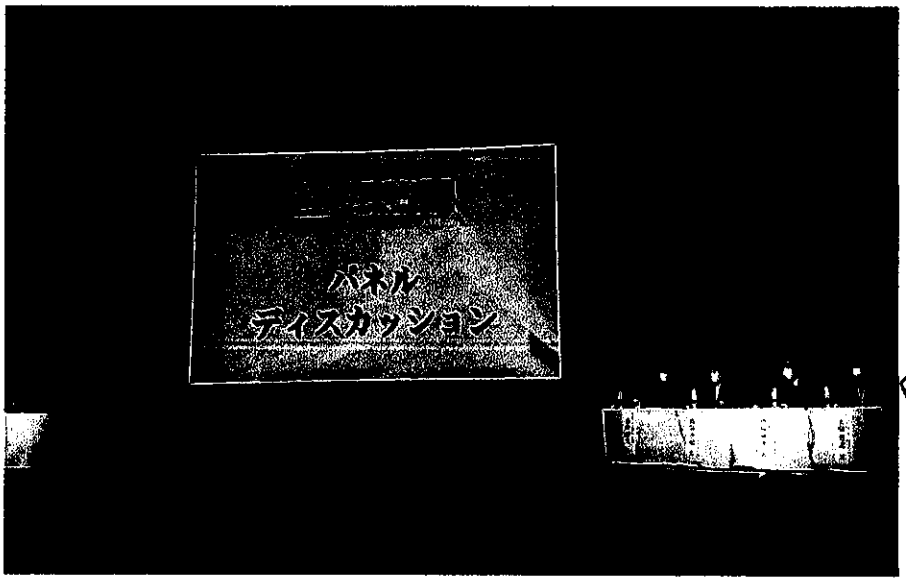
その他、＊地域づくりの到達点―新しい動きとの連結について、＊にぎやかな過疎をつくる―過疎地域からの創生について講演を聞いた。

15時10分～パネルディスカッション

テーマ「過疎　新時代」新しい時代の流れを力にする
―創造的復興の現場からのメッセージ―

コディネーター:法政大学現在福祉学部教授　図司直也氏

パネラー:福島県西会津町CDO　藤井靖史氏
兵庫県朝来市総合政策課課長補佐　馬袋真紀氏
熊本県玉磨村副村長　門崎博幸氏
一般社団法人みなみあそ観光局戦略統括マネージャー　久保堯之氏

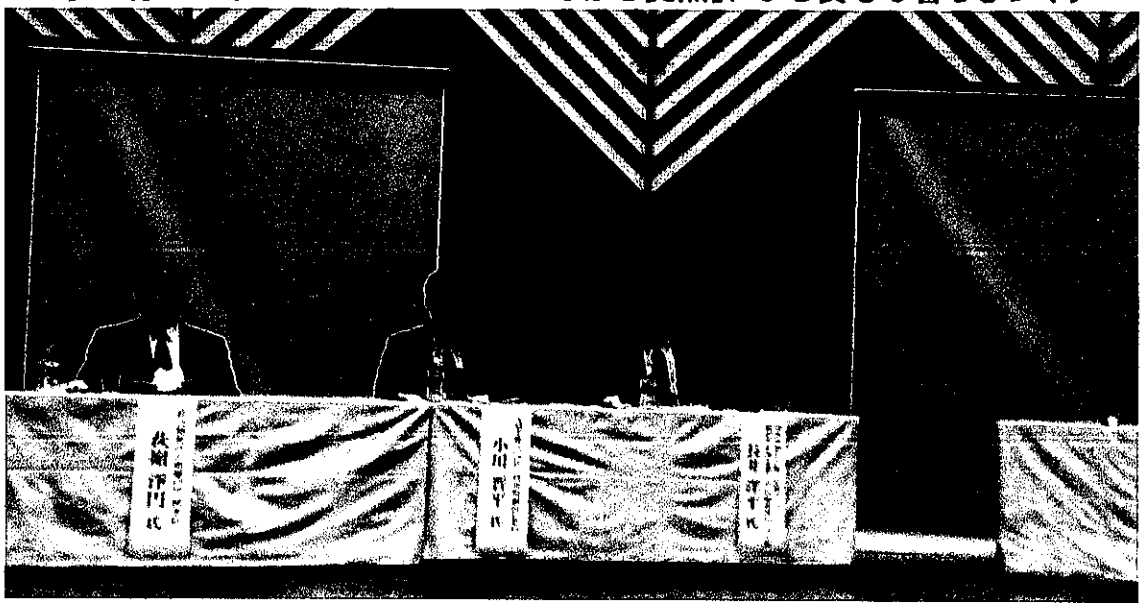


過疎新時代ーお宝は地域に眠っているーDXは組織や仕事の仕方の革新と。
目的が無ければ観光局は戻ってこない一道をつくるのが行政、目的をつくるのは民間の役割と。

16時40分～時期開催県の紹介：富山県　　16時45分閉会

10月21日現地視察：水俣市総合もやい直しセンターもやい館

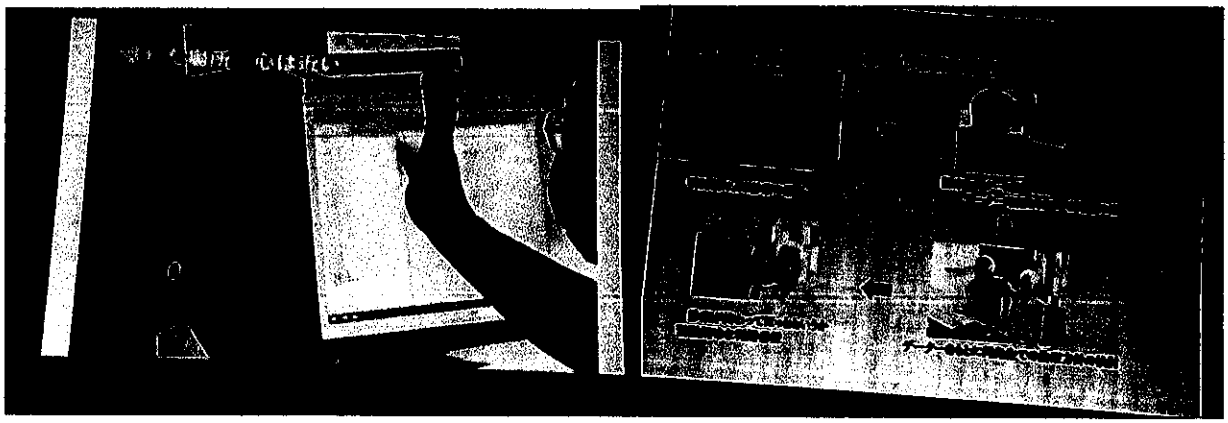
10時10分～パネルディスカッション「つながる拠点」による安心な暮らしづくり



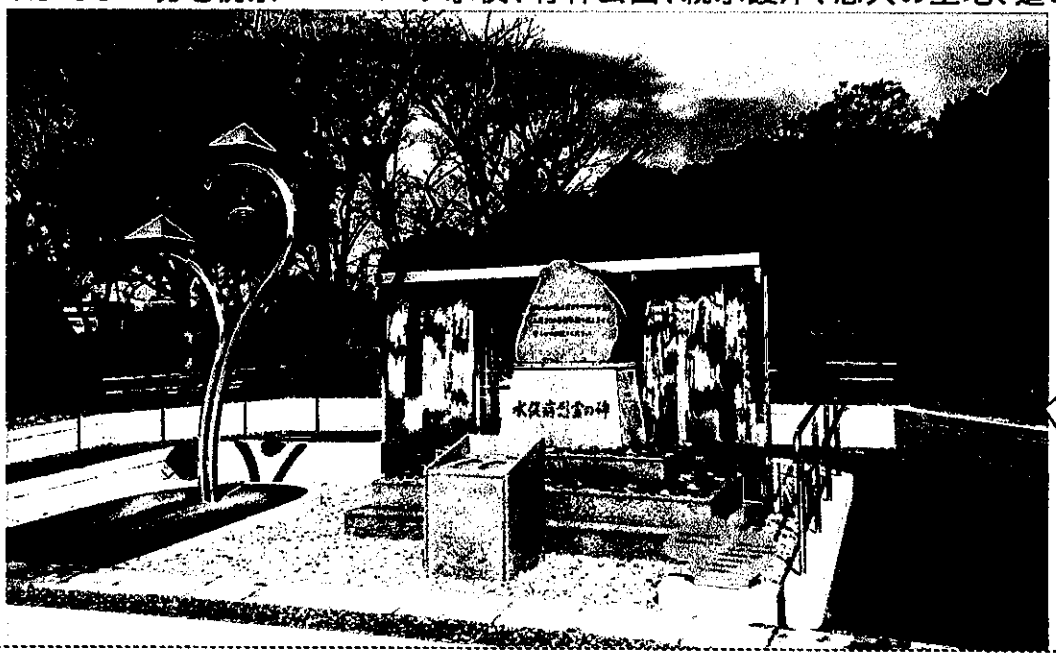
コディネーター：元村仁美　水俣市産業建設部経済観光課経済振興室　室次長
パネリスト：小川晋平　AMI株式会社代表取締役CEO
萩嶺淨円　社会福祉法人照徳の里理事長
長井洋平　国保水俣市立総合医療センター統括外科部長兼ICT医療推進センター長

水俣市では、暮らしている場所や身体の状況に関わらず、適切に医療が受けられ、住み慣れた場所で安心して暮らし続けることができる地域を目指して、令和3年度にICTを活用したオンライン診療の実証実験「医療アクセス確保と住民のQOL向上のための多職種参

加型オンライン連携診療モデル構築事業」を実施した。総務省の補助金2,000万円を活用して、病院や施設、在宅を結んでの診療の様子の事例を提示しディスカッションが行われた。オンライン診療に取り組んで、移動困難者に対して寄り添う医療が届けられた。とか、患者との心が逆に近づいた。等の効果が聞かれた。しかし、診療報酬の面や医師会との意見調整など課題はおおく残っているとのこと。



12:00～現地視察　エコパーク水俣、竹林公園、親水護岸、恋人の聖地、道の駅みなまた



水俣病慰霊碑

水俣病慰霊の碑

水俣病慰霊碑

水俣病慰霊碑

水俣病慰霊

大きな課題だと感じているようですが、オシメ業者と課題解決に向けて真剣に向き合う必要を強く感じました。液肥の利用は、大木町もみやま市も米と麦がほとんどであった。真庭市も米に対して利用を促進するのであれば、米や麦の付加価値を上げて、生産者にメリットが生まれることを考える必要があるとおもう。その一番としては、学校給食に真庭米が直接使用できる検品体制を整えることを提案します。真庭の食料需給率を上げる第一歩が、学校給食の地産地消の推進と思う。

過疎問題シンポジウムでは、水俣市のオンライン診療の取り組みを見学しました。真庭市にも導入できないものかと考え、期待して参加しました。3年ほど前、金田先生が医師会長をしておられた時に、モデル事業に参加してみては？との提案が国会議員からありましたが、医師会がどうも賛成ではなかったようです。医師が往診したほうが診療報酬が高い。特別養護老人ホームは介護保険適応施設であるためオンライン診療は認められていない。オンライン診療をしている医療施設への患者の抱え込みの問題。等、課題がありました。

へき地診療を行っている湯原温泉病院に、訪問看護の強化と同時にオンライン診療を進めることを提案したい。高齢化率が高い地域は、病院受診をしたくてもできない、かといって往診はコストが高い。国民年金生活者は、医療受診も介護保険サービスの利用もセーブしている可能性があると思う。どこにいても安心して生活ができる最低条件は、何時でも医療機関とつながることができることだと思うので、今後真庭市も導入することを期待する。(文責:大月)

報告書（継紙）

10月19日～21日熊本視察研修参加者の報告書

視察研修(九州)報告書　黒川愛

● 10月18日「生ごみ等資源化施設設」先進地視察　福岡県(みやま市・大木町)

日本では、真庭市、福岡県みやま市、大木町、築上町の計4市町が、バイオ液肥の製造と施肥に取り組んでいる(2022年9月15日日本農業新聞)。

真庭市では、現在はモデル事業が実施中で、2024 年から「生ごみ等資源化施設設」が本格稼働予定。総額約52億円(建設費38億+液肥濃縮設備初期投資14億円)の大事業で、課題も多くある。先進地視察を願っていたところ、今回、行政視察の機会を頂くことができて、ありがたかった。

課題の1つは、「生ごみ」収集で、市民の大協力が必要だ。真庭市環境課の説明によると、収集については、今後も大きな問題は発生しない見込みである。それでも、みやま市では、やはり生ごみの量で伸び悩んでいた。「やはり」というのは、他の地域でも起こったことで、最初は伸びるが、時間が経つと落ち着いてしまい、場合によっては、少し減るそうだ。

ごみの分別は、手間で面倒である。大木町は、2008年に「大木町もったいない宣言」を行い、これ以上子どもたちに「つけ」を残さない町を創ることを決意。100回を超える住民説明会などを行い、持続可能なまちづくりをすすめてきた。大木町のごみ分別は29種類。多くの手間と面倒は、ごみ処理費用の削減につながり、結果、大木町には初の図書館や交流センターがつくられた。何とも夢のある施策で、ごみ分別のやりがいを感じる。持続可能な生ごみ収集に向けては、『環境に良い』『地域に良い』という思いや気持ちの部分と合わせて、やった事の見える化、やりがいの見える化が必要だろうと強く思った。

また、大木町のバイオマス・ごみ処理施設には、道の駅が併設されていた。そこには、地元食材を使ったビュッフェレストランがあり、私たちが訪れた平日でもほぼ満席で(ほぼ女性客)、噂どおりの、大人気店だった。温かみがある居心地の良い店舗づくりで、生産者や食材を前面に押し出し、お料理は野菜たっぷりで大変美味しかった。広い窓からは、同じく併設の広場のような芝生で、子どもたちが遊ぶ姿や、お年寄りがひなたぼっこしている姿も見えた。

リサイクルセンターでは、職員さんが分別方法や処理について丁寧に、熱心に説明してくださった。環境に関心のある、移住者の職員さんで、ごみの分別についての思いや熱意が伝わってきた。

『生ごみ等資源化施設設』のハード整備だけではなく、まち全体で、ハードとソフトで複合的な『子どもにつけを残さない』まちづくりをしていることを現地でリアルに拝見することができ、大変感銘を受けた。今後の真庭での取り組みに向けて大変勉強になった。

● 10月19日 熊本城:震災復興ツーリズム 熊本県(熊本市)

私は、神戸(阪神・淡路大震災)、南相馬(東北大震災)、倉敷(西日本豪雨)と、災害ボランティアに参加し、その後の復興を遠くから応援してきた。熊本の被害や復興の取り組みは、メディアや知人から聞いている限りで、今回、初めて、震災復興と観光をあわせて行っている『熊本城』を訪れた。

観光として復興の現場を見せていくことの力強さに大変驚いた。災害の大きさ、命の尊さ、地域の歴史と学びが観光と掛け合わされることで、地域を訪れる人へより大きな影響を与えるのだと実感した。瀬戸内芸術祭の観光xアートなど、観光x〇〇の可能性は大きい。いま、真庭では、市内の発酵食の事業所を巡る『真庭発酵ツーリズム』や、蒜山の戦争遺跡を巡る『蒜山平和学習コース』というプログラムがあり、地域の方々と真庭観光局が取り組んでいる。現地でしか体験できない真庭観光の魅力を、地域の方々とさらに考えていきたい。

● 10月19日 全国過疎問題シンポジウム2022 1日目 熊本県(熊本市)

シンポジウム1日目は、私は、明治大学農学部教授の小田切徳美氏の講演を楽しみにしていた。『にぎやかな過疎を目指して』というテーマで、小田切先生らしい、何冊分の本がまとまったような大変濃い内容で、分かりやすく理論が組み立てられていて、地域課題と可能性のエッセンスが詰まったような講演だった。そのうえで、「『過疎 新時代』新しい時代の流れを力にする」ー創造的復興の現場からメッセージーのシンポジウムはさらに素晴らしく、私にとって、小田切先生の講演を上回る、より実践的な学びとなった。

世代によって、地域に関わる動機は異なる。シニアは『義務感から参加』、若者は『楽しいから参加』することが多いので、その違いを大切にしながら、対話の場をつくり、地域自治に取り組むことが大切だと学んだ。分かっているようで、認識できていなかった事柄だった。

また、シンポジウム会場では、岐阜県飛騨市長と熊本県玉名市議長にご挨拶し、短い時間ではあるが、3者で意見交換ができた。飛騨市と玉名市は、真庭市でも取り組んでいる『食べる薬草』の仲間の地域。飛騨市長は、令和 4 年度過疎地域持続的発展優良事例表彰で参加されており、玉名市議長は地元熊本県から参加。こうした場で、真庭市の取り組みについてもお話ができ、遠く離れた3つの自治体地域が合わさり、意見交換が出来たのは大変有益で、ありがたかった。

● 10月20日 全国過疎問題シンポジウム2022 2日目 分科会 熊本県(水俣市)

視察研修の最終日は、水俣市で地域医療の分科会に参加した。午前中は、「もやい館」という、「人と人が支 えい一緒に何かをする」ためにできた施設での勉強会だった。オンライン診療など、実際の操作とともに学んだ。最先端の取り組みで、大阪の病

院なども来られていた。質疑応答では、真庭市からの大月議員／看護師から、地域医療の専門的な質問があった。水俣市の職員さんも、とても参考になった、また教えて欲しいと言われるほど、参加者一同大変勉強になった。

午後からは、「水俣エコパーク」への現地視察だった。水俣エコパークは、水銀を含むヘドロが溜まった湾を埋め立てて作られ、約 60 ヘクタール、東京ドーム 13 個分の広大な公園。敷地内には、日本の公害の原点とも言われる水俣病の慰霊の碑もあった。碑には、珊瑚や貝殻など、陶器か土器で作られた海産物のお供えがあった。二度とこのような悲劇を起こしてはいけない。水俣だけの問題ではなく、日本全体の問題である。

おだやかで美しい不知火海を目の前に、公害の悲惨さと無念さを改めて感じた。分科会では、水俣病についてはあまり触れられなかったが、水俣市で教育旅行などに取り組んでいる方と立ち話ができた。熊本県と教育旅行の冊子を作られていて、短い間だったが貴重なお話しを伺えた。

最後に、コロナ禍でオンラインの勉強会も数多く開催され、日本における ICT と学びはさらに進化している。しかし、こういった現地でしか学べないことは沢山あり、現地での偶然や、対面ならではのこぼれ話よって、大切なことを学ぶことは意外に多い。そのことを改めて体感した 3 日間だった。コロナ禍ではあるが、コロナ対策を行いながら、先方が許す範囲で、積極的に市内外の現地を伺い、学びを深め、真庭市の取り組みに役立てていくことができればと切に思う。

視察研修内容　森田敏久

① 循環センターくるるんでは、環境のまちづくりの拠点として生ごみ、し尿、浄化槽汚泥から有機肥料、エネルギー（メタン発酵）をつくり、街づくりの拠点施設として農産物直売所、健康地域応援レストランと道の駅機能を併設した施設であった。
メタン発酵による電力で公用車の燃料利用をはじめ、液肥づくりのため発酵を促す温度管理（37℃で20日）を行うなど相乗効果を促す取り組みを学んだ。液肥利用については町内耕作地の10％を占め液肥代金無料散布費用1000円/10a（みやま市 1100 円）を徴収している。散布に関して液肥のにおいはあまり感じなかったが、近隣の住民の同意が必要であり真庭市も同じ課題があるように感じた。
リユースプラザくるくるでは徹底した分別が行われ、収集場所内で再利用が行われていた。特筆すべきは1時間圏内に製紙工場があるため紙おむつも建築用壁材に使用されるとのこと。真庭市でも検討の余地があるのではと思われた。

② 大木町と同様液肥プラントと市役所からの説明を受けた質疑が行われた。みやま市でもごみの細かい分別が行われ、またバイオ液肥の施肥方法を詳しく公報しているようであった。また生ごみの資源化に向け生ごみの受け入れは無料にし燃えるごみの受け入れは 1.5 倍にするなど処理料金の見直しが行われていた。

「『にぎやかな過疎』目指して」と言う演題により明治大学小田切徳美教授の講演受けた。私自身一般質問を行った新過疎法(過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法)はハード面による支援法ではあるが人材の確保及び育成により未来世代の協調が重要との意見を聞いた。過疎指定とは全体として人口減少の過程にある、我が国で必要な挑戦のフロンティアとして位置づけられた地域として従来とは異なる仕組みづくりを進めなければいけない。地方創生とは、ひと まち しごとを一体的に推進するっことで人口減少を止めることより人材育成が必要とのことで若者によるしごとを作ることが重要とのことである。わいわいがやがやとした過疎を作るという事で今後の真庭のまちづくりの参考になった。

③ 2 部では過疎新時代というテーマで4名によるパネルディスカッションが行われて子供からお年寄りまで巻き込んだ活力のある地域づくりが必要という事であった

④水俣市に於ける病院、民間企業(代表者は医師)社会福祉法人が連携したリモート聴診器による診察の現場を学んだ。過疎地から高齢者が通院しなくても医療が受けられる今後の一つの医療体制の在り方を考えさせられた。

視察研修感想 伊賀基之

◎大木町、みやま市視察

○し尿、生ごみを資源化(液肥)することが、自分たちの町の課題解決や、地域の環境を守ることにつながるということを市民が意識しているということが重要と思います。真庭市の場合でも、単にごみ処理の費用削減だけでなく、自分たちのライフスタイルの見直しにつながることであるという気持ちをどう作っていくかが大切であると思います。そのことがし尿、生ごみの処理だけでなく、さらにリサイクルの徹底とかマイクロプラスチックの問題につながっていくと思います。

○ゴミの分別について・・・真庭市はプラスチック類を焼却していますが、生ごみ資源化で焼却しなくてもよくなると、プラスチック類の再資源化に取り組む必要があると思います。それが、マイクロプラスチックの海洋汚染の問題にもつながってくると思います。

◎過疎問題シンポ

○基調講演

「まち」「ひと」「しごと」の一体的な推進・・・若者による従来では考えられなかったような多様な起業、

にぎやかな過疎をつくる・・・関係人口の増加をどう作るか、この辺がポイントと思いました

○シンポジュウム

朝来市の取り組みに参考になる点が多かった。

地域組織を育てる(自治会など)・・・この辺は真庭市は不十分だと思います。そしてその自治組織の中から、やりたい人が集まる地域おこしのグループが生まれる。特に

若者グループの育て方(いつでも、どこでも、この指とまれ方式で)が大切だと思いました。若者の参加するポイント(楽しい、開かれた、共感する)はよくわかります。
また、地域おこし協力隊のかかわり方も大切であると思います。真庭市の参考になる点が多かった。

○分科会(水俣市)

リモート診療は、進みつつあるとはいえ、まだできることが限られています。もう少し多くの診察内容が可能にならないと、あまり真庭の場合現実に利用ということにはならないと感じました。

公害病の原点である水俣市に行けたことは、大変灌漑深いものがありました。

視察研修報告　庄司史郎

真庭市が進める液肥化資源循環施設事業における課題を探るために、10月 19 日(水)に福岡県大木町のおおき循環センター「くるるん」とみやま市バイオマスセンター「ルフラン」の視察研修をしました。

大木町、みやま市ともに現時点では、ほぼ目標としていた運営ができているように思えた。そして、成功している大きな要因は、事業実施に当たって住民に対する事前説明がしっかりとなされていること、そのことによって住民の理解と協力が得られている点であると認識した。

真庭市では平成6年度から施設の稼働が予定されているが、市民に対し生ごみ収集等の細かな説明等の取り組みが示されているとは言い難い状況であり、今後の取り組みが懸念される。

10月20日(木)～21日(金)に開催された「全国過疎問題シンポジウム2022inくまもと」に研修参加しました。

20日の全体会におけるパネルディスカッションでの地域の活性化について、パネリストの藤井靖史(ふじいやすし)氏(福島県西会津町　CDO)からインターネットを活用しての人材確保、外部人材にオンラインで参加してもらいアドバイスや情報提供などを受ける。しかし、そこにリソースがないと外部人材を活かすことが出来ない。馬袋真紀(ばたいまき)氏(兵庫県朝来市総合政策課課長補佐)から、地域住民が主体となって取り組む地域自治的な活動について、地域における会議のあり方や、住民が自分らしく活躍できる地域づくりを目指した取り組みの中で、大切にしていることとして、話したということだけで終わらせないために話し合いで出たことを言語化することが大事。などとの発言があり、地域づくりを考える上での参考となった。

地域活性化を図る上でのキーワードは、地域を引っぱって行く人材(地域リーダー)をいかに育てていくかに掛かっている。

21日の分科会では、水俣市で実施している「医療アクセス確保と住民の QOL 向上のための多職種参加型オンライン連携診療モデル構築事業」の模擬のオンライン診療のデモンストレーションなどがあり、中山間地域で広い市域を有し、益々高齢化が進んで行く真庭市を考えると、移動困難者などの受診の負担軽減や、どこに住んでいても安心して医療サービスを受けることが出来る環境整備の必要性を強く感じるとともに、真庭市における ICT 技術を活用したオンライン診療の構築に向けた研究・検討が求められる。

「全国過疎問題シンポジウム２０２２inくまもと」に参画して

期間　2022.10.19-21
参加者　庄司、大月、伊賀
森田、黒川、伊藤

視察・研修場所		内　　容
１９日	おおき循環センター 道の駅くるるん	・大木町の概況→人口14,200人、面積18.43平方キロで柳川市に隣接した農業の町。平成の大合併の時に、合併を選択せずに住民協働のまちづくりを推進し全国で2番目に「ゼロ・ウエイスト宣言」を公表した。公共下水は無い。 ・ゴミを２９分類し、リサイクル率65.4％を実現し2,800万円X15年間＝42,000万円を削減して図書館、ホールを作った。 ・生ゴミをメタン発酵させ液肥を作っているが、そのプラント施設を街の中心部にレストラン、農産物直売所、環境学習室を併設して作っている。レストランは平日にも関わらず満席でした。「道の駅くるるん」を運営することにより57人の雇用を創出した。 ・地政学的有利を活かし、紙おむつを分別している。　(製紙工場) プラのリサイクルを筑後7市町合同で施行している。 ・液肥は濃縮せず、液肥は無料だが散布代1,100円/10a貰う。 匂いはアンモニア臭もなく穏やかである。 ・燃えるごみの指定袋35L 60円と値上げし、プラ指定袋35L 10円に下げた。(分別しゴミを減らした人が得をする仕組) ・住民ガイド、ごみサポーター制度、ごみゼロコンテスト等推進制度は多数ある。
	環境プラザ	・市民が資源ごみ、粗大ごみを持ち込む場所で指定管理で運営。49分類している場所へ市民が分別して置く。 ・担当者は、目下の悩みは持ち込まれた資源ごみ等が雨ざらしで、細かく分解する物が増えている。と嬉しそうでした。
	みやま市バイオマスセンター	・みやま市の概況→　人口35,788人、面積105.21平方キロで農業が基幹産業である。廃校をバイオマスセンター、カフェ、食品加工室、オフィスに利用する。 ・大木町同様、紙類・衣類回収BOXを地域に置いたり、紙おむつの分別リサイクルを行っている。リサイクル率は35%で日本平均の2倍である。 ・ゼロ・ウエイスト宣言を行っている。(全国で５箇所) ・ごみ焼却施設は柳川市と二市共同です。 ・大木町同様、燃やすごみ袋の値段を上げている。生ゴミは無料。

		・推進の課題は行政説明会で、エコサポーター制を推進している
２０日	市民会館シアーズホーム夢ホール	・「にぎやかな過疎を目指して」 ①地域づくりは（持続的低密度居住地域）「地域の思いと力で」「地域なりに」「今までと違う方法で」作り直す。 ②地域づくりの３要素は、「人材」「場作り」「しごと」です 人材は「当事者意識」を持つ人々のこと。 しごと作りの新しい形に、特定地域づくり事業共同組合がある。Uターンに可能性あり。人口は減っても多様な人材 ③関係人口から移住へ（関わりの段階を深める）
２１日	水俣市	・熊本県の南端に位置する人口24,275人、面積163.29平方キロの環境モデル都市です。 ・オンライン診療を体験しました。 医療こそICTを使い僻地の患者さん、交通の便の悪い患者さんを救う。現在は規制・技術・通信速度・ソフトウェア、調剤・診療報酬等課題はあるが、「クラウド総合病院」を作るの夢だと語る医者がいました。 医師会が率先して取り組んでいました。